

【⑥カンボジアボランティア研修】研修体験報告書（1）

研修時の 本学の所属・学年・性別	特別支援教育教員養成課程 1年 女性
研修期間	2017年8月22日～2017年9月2日（2週間）
研修先の国、研修先・訪問先	国：カンボジア 研修先・訪問先：CMC（バタンバン） 孤児院（シェムリアップ）
研修参加目的・動機など	連携推進課に行くと、去年研修に行った人たちのポスター報告が壁一面に貼られていて、ただ「楽しそう、行ってみたい」と思ったので、参加しました。 映画でカンボジアの歴史については知っていたので、すこし興味もありました。
研修参加を考え始めた時期	5月ごろ。 友達に誘われて説明を聞きに行ってそのまま即決でした。
求められた語学力 及び具体的な準備内容	（求められた語学力） 自己紹介ができる程度の語学力（あまり求められていなかったような気がします） （準備内容） カンボジアの文化・歴史・現状について学ぶこと 事前研修で、一緒に参加するメンバーと打ち解けること
情報収集方法	昨年研修に参加した学生や職員さんから 映画「地雷を踏んだらサヨウナラ」 映画「僕たちは世界を変えることができない。」 映画「最初に父が殺された」 映画「カンボジアの失われたロックンロール」
居住環境	シャワーのみ、水洗トイレ
研修先に持参した方がよいもの	洗濯紐、安全ピン
物価（食費、住居費等 日本の物価と比較して）	日本より安い （1ドルで800mlくらいの水を3本買えたと思います）
研修の必要総額 （渡航費、生活費を含む）	総額 10万円かからないくらいだったと思います

治安状況	観光大国だけあって、カンボジアの人たちは基本的にフレンドリーのように感じました。 「観光客」であることを忘れず、気を引き締めていれば、比較的に怯えることなく過ごせると思います。
その他注意すべき事項	特になし

留学・短期研修等体験レポート（自由記述）

「ボランティア研修」というと、「慈善活動してきたの？」とよく言われます。でも、百歩譲っても研修中に「慈善活動」と呼ばれるようなことはなにもしませんでした。

「じゃあ、なにしてきたの？」と聞かれて、一年生の頃の私は少し悩んで、結局「カンボジアを知った」その一言しか伝えることができませんでした。

今、このレポートを書く私は、次の春で卒業をする四年生です。研修に参加した時から、三年が経ちました。大学生になって初めての夏休みで体験したことが、私の大学生活にどのように影響を与えてきたか、三年間寝かせた思いを伝えたいと思います。

この研修は、「ボランティア研修」と銘打ってあるだけあって、語学研修のように「語学の向上」というよりは、もっと「人としての柔軟さ」を求められていました。日本以外の文化や暮らしに触れて、そこに住む人たちと関わることで、人としての経験値や考え方の多様性といった、内面性の充実を求められていたような気がします。

研修中はグループ活動が基本でした。グループ活動をする中で自分の役割に気づいたり、チームワークによって学べることの量や質に差がついたりする経験が、面倒くさがるの私にとって人と行動することの意味を教えてくれるようなものでした。これは、教育実習や大学生活を通して、とても役に立つことでした。

そして、カンボジアという国に行くことに「ボランティア研修」の意味はあったのではないかと思います。実際、研修先のカンボジアの人たちの笑顔の裏には、簡単に触れてはいけないような扉がありました。貧困、飢餓、孤児、地雷、虐殺の事実、、、そのすべてが現在進行形で人々の生活や心に潜むものでした。孤児院の子どもたちは必ずしも親がいないわけではない、その子が感じる疎外感に触れました。子どもを授かって「これからだ」と意気こんだ矢先、地雷で足を失った男性の絶望感を見ました。まだ50年も経っていない虐殺の事実を抱えた、カンボジアの人たちは、どこか遠い目をしていました。それは孤独や絶望に浸った目ではなく、心の底から平穏な生活を求めているように感じました。私が出会ったカンボジアの人みんなが、自分以外の誰かの幸せを願っていました。孤児院にいた女の子は「家族が食べていけるなら、私はここ（孤児院）でいい」と言っていました。足を失くした男性は、地雷を埋めた過去を恨んでいませんでした。「あの時は、そうするしかなかった。これからは地雷を埋めなくていい未来になってほしい」と言っていました。

そんな現実を目の当たりにして日本に帰ってきた私は、何もできない自身のちっぽけさに打ちひしがれていました。ただ「知ることしか出来ない」と悟った私は、戦争映画やノンフィクション映画・ドキュメンタリーを、それまで以上によく観るようになりました。戦争や迫害、災害被害の跡地を回る「ダークツーリズム」にもよく出かけました。

「まずは知ること、感じること」その大切さを、大学一年生の夏、カンボジアでのボランティア研修で教わりました。そして、それらを「伝えていくこと」。私たちは、「教育」というツールをもってい

ます。次の春からは、大学で知ったこと・感じたことを「教育」を通して、子どもたちや周りの人たちに伝えていく番だと思います。

最後に、「身に付いた能力」や「将来に役立つ経験」だけでなく、大学生生活4年間で有意義なものにしてくれたこの研修に何よりも感謝しています。

【⑥カンボジアボランティア研修】研修体験報告書（2）

研修時の 本学の所属・学年・性別	特別支援教育教員養成課程 初等教育部 1年 女性
研修期間	2017年8月22日～2017年9月2日
研修先の国、研修先・訪問先	国：カンボジア 研修先・訪問先：シェムリアップ、バタンバン
研修参加目的・動機など	それまで海外に行ったことがなく、大学生になったら海外に行ってみたいとずっと思っていました。また、児童養護施設や孤児院で働くことに興味があり、海外の孤児院でボランティアの経験をする良い機会だと思い参加しました。
研修参加を考え始めた時期	大学1年生春
求められた語学力 及び具体的な準備内容	(求められた語学力) 挨拶、簡単な文章を述べる程度の英語力 (準備内容) 研修に参加するメンバーで研修先の国の文化・教育について調査した、英語習得院に通った
情報収集方法	連携推進課の方からもらった資料や先輩の資料
居住環境	ユニットバス
研修先に持参した方がよいもの	薬、虫よけ、インスタント味噌汁などの簡単な日本食
物価（食費、住居費等 日本の物価と比較して）	日本より圧倒的に安い
研修の必要総額 (渡航費、生活費を含む)	総額 30万円
治安状況	基本的には良いと思うが夜は出歩かない

その他注意すべき事項	特になし
------------	------

留学・短期研修等体験レポート（自由記述） ※1ページ以上2ページ以内

大学一年生の夏休みにカンボジアボランティア研修に参加しました。私にとって初めての海外経験となったこの研修を振り返ってみて、印象に残っていることは大きく2つあります。

1つ目は、カンボジアの人々の笑顔と生き生きとした姿です。研修前、カンボジアは、日本に比べると貧しくて何となく暗いイメージでした。でも、実際に現地に行ってみると、日本のように便利で裕福でなくても、現地の子供たちは笑顔が絶えず、学べることを喜び、たくましく生き生きと過ごしていました。その姿を見て、何事も自分の感じ方、とらえ方次第だということを学びました。日々に充実感を感じられなかったり、不満が出たりしたときに、周りの環境のせいにせず、「自分の感じ方と行動次第だから自分で良い方向にしていこう」というような考えに変わったきっかけになったと思います。

2つ目は、地雷被害者の方のインタビューです。現地に行く前に資料をみたりして学習することと、実際に現地で現地の方のお話を聞くのでは、心に訴えかけてくるものの大きさが全然違いました。お門違いと分かっているながらインタビューをしながら涙が止まらなくなりました。それほど本当に訴えかけてくるものがあつたと思います。このインタビューでは、どんな歴史があつたのかを知るだけでなく、人と人との繋がりや家族についてなど考えさせられることがたくさんあり本当にお話を聞いて良かったと思っています。

カンボジア研修では、現地でしか感じられないことがたくさんあり、関わることのできなかつた人々にたくさん出会えてとても感謝しています。また、ハプニングもたくさんありました。途中で体調を壊したり、シャワーが水しか出なかつたり、虫をよけながら食事をしたり、研修で一緒だつた友人とよくそんな思い出話もします。

これからも、1日1日を精一杯過ごし、そしていつかまたカンボジアを訪れたいです。

【⑥カンボジアボランティア研修】研修体験報告書（3）

研修時の 本学の所属・学年・性別	中等教育教員養成課程 理科専攻 2年 女性
研修期間	2019年8月19日～2019年8月30日
研修先の国、研修先・訪問先	国：カンボジア 研修先・訪問先：一二三日本語教室、BBU、CMCセクソク林田小学校、 グレイス英語教室
研修参加目的・動機など	大学に入学してから、誰にでも得ることができないような経験をしたい と思うようになった。カンボジアのボランティア研修は、食堂前の掲示 板で知り、もともと海外ボランティアに興味があったため、いつか私も 行きたいと考えていた。1年生の頃はなかなか踏み出せなかったが、2 年生になり思い切って説明会に参加し、研修へ申し込みをした。説明会 には中等理科の学生は1人もおらず、最初はかなり迷ったが、結果的に メンバーには大変恵まれ、とても有意義な研修となった。
研修参加を考え始めた時期	2年生4月
求められた語学力 及び具体的な準備内容	(求められた語学力) 日常会話程度。 現地には英語が話せない人達もいたため、自分の意志を伝えるのに苦労 した時もあったが、ジェスチャーなども交えてコミュニケーションをと ることで、より楽しく話すことができていた。 (準備内容) 現地の言語を少しだけでも習得しておく。カンボジアの場合はクメール 語で挨拶や感謝の気持ち、自己紹介などを勉強して行った。
情報収集方法	先輩、英語科の学生や先生方、連携推進課の方々
居住環境	私たちはホテルに宿泊したため、夜もよく眠ることができ、快適に過ご せた。
研修先に持参した方がよいも の	現地でお世話になる学校や先生方に、日本で購入したお土産を渡した。 お菓子だけでなく、生徒たちには日本での遊び道具として有名なけん玉 や折り紙、竹とんぼなどをプレゼントし、一緒に遊んだ。
物価（食費、住居費等 日本の物価と比較して）	物によるが、だいたい物は日本より安かった。
研修の必要総額 (渡航費、生活費を含む)	総額 約30万円
治安状況	あまり良くない。

その他注意すべき事項	特になし
------------	------

留学・短期研修等体験レポート（自由記述）

私はこのカンボジアボランティア研修で、積極性や自信を身につけることができました。まずこの研修に参加するにあたり、事前研修が数回行われた。まわりは友達同士で来ている人達もいて、なじめるのか最初は不安だったが、事前研修で一緒にカンボジアについて調べて学んだり、プレゼンを行ったりしていくうちに、かなり打ち解けることができた。ここでは、早くメンバーと仲良くなりたいという気持ちもあったため、積極的に意見を述べた。

現地に到着し、本格的にボランティア研修が始まってからは怒涛の日々で、毎日が一瞬で過ぎていった。正直、カンボジアに来るまでは現地の人達とコミュニケーションをとれるのか、治安はどうなのかなど、他にも不安があったが、その不安をかき消すほどに忙しく、充実した時間であった。現地の人達とのコミュニケーションに関しては、一二三日本語教室では日本語を話すことができる人達が多く、お互いの国のことや他愛のない話をたくさんすることができた。また、日本語の授業もあるため、その時、たちは先生として、学習のサポートをした。私が特に印象に残っているのは理科の実験である。一二三日本語教室の先生から、「教室の生徒たちに何か授業してみよう」という提案があり、研修メンバーの理系の人達で、理科の実験を行う授業をした。カンボジアでは理科の実験は全く行われず、座学ばかりと聞いていたため、みんなが理科に興味をもってもらえる内容を試行錯誤した。現地で調達できる物で実験道具をつくり、説明の仕方を考える上で、このような経験は、将来教師になった時に必ず役に立つと感じた。また、今すぐにはとはいかないが、また機会があればカンボジアを訪れて、理科の授業をしてみたいと考える。最終的には実験は成功に終わり、日本語教室の生徒たちは非常に喜んでくれ、授業が終わっても実験道具で遊んだり、再び実験したりしていた。

一二三日本語教室だけではないが、現地の学生と触れ合うことで感じたことは、彼らはかなりの勉強熱心であるということである。英語はもちろん、日本語や他に興味がある言語を勉強していた。どのような環境でも、ひたむきに努力し、またそれを楽しむ姿に大変感銘を受けた。また、学習面だけでなく、コミュニケーションを取る上で、明るく元気に話をしてくれたり、理解してくれようとする姿にとっても救われた。私がボランティアのために訪問したはずが、逆にエネルギーをもらっている場面が多く、現地で関わってくれた方々には大変感謝している。今でもSNSで繋がっている人もいるため、近況などが知ることができて嬉しいし、また会いたいと思う。

以上で述べたように、とても明るく、元気がもらえるような経験をした他に、辛い面も見てきた。カンボジアは日本に比べて貧富の差が激しく、訪れる地域によって見る光景が180度違った。このような日本では決して見ることはできない状況を目の当たりにして、胸が痛くなったのと同時に、日本は大変恵まれている国であると改めて感じた。世界には生きようと努力している人がたくさんいる中で、私は自

分自身の生活や考え方を振り返る機会となった。

このカンボジアのボランティア研修に参加することで、私は他では得難い経験をたくさんすることができた。教師になってからだけにはとどまらず、日常生活でも活かすことができる経験であると考えている。研修がきっかけで、英語をさらに勉強するようになり、世界のニュースを見たり調べたりするようになった。これからもそれを続けていき、また海外に行ける状況になったらカンボジアを訪れたいと思う。

【⑥カンボジアボランティア研修】研修体験報告書（４）

研修時の 本学の所属・学年・性別	初等教育教員養成課程 1年 男性
研修期間	期間：2019年8月19日～2019年8月30日
研修先の国、研修先・訪問先	国：カンボジア 研修先・訪問先：シェムリアップ、バタンバン
研修参加目的・動機など	大学生活に刺激が欲しく、新しいチャレンジがしたかったため。 異文化に興味があったため。
研修参加を考え始めた時期	大学入学後すぐ
求められた語学力 及び具体的な準備内容	(求められた語学力) 日常会話ができる程の英語力 (準備内容) 研修に参加するメンバーで研修先の国の文化・教育について調査しました。
情報収集方法	インターネットや本、先輩方等のお話から。
居住環境	ホテル
研修先に持参した方がよいもの	電源変換アダプター
物価（食費、住居費等 日本の物価と比較して）	かなり物価は安く、Tシャツ一枚100円程度。
研修の必要総額 (渡航費、生活費を含む)	総額 約20万円 (内訳) フライト料金 研修費 約15万円 その他（お土産代、食費など）3万円
治安状況	野生の動物に気を付ける（狂犬病等）。
その他注意すべき事項	できる予防注射はしていくべきです。

留学・短期研修等体験レポート（自由記述）

研修によって身に付いた能力は、広い視野です。世界にはたくさんの、たくさんの人がいるということを知りました。それから、自分中心の人生という考え方から、みんないろいろなことに闘って生きているから、自分も頑張ろうと思えました。遠く離れたカンボジアで、一生懸命に日本語、英語を勉強している人、必死に働いている人、たくさんの人が今を生き抜いているのだと、日本を出ることで感じることができました。このような広い視野はこれから多様性が求められている社会にとって必要不可欠だと私は思います。前に行った人たちのレポートを見るより、実際に参加しないと分からないことがたくさんあります！！研修の感想を表現するには言葉だけでは不十分です！ぜひ参加してみてください。

（以下、研修直後のわたしのレポートより）

今回初めてカンボジアという発展途上国に行った。はじめにカンボジアという言葉を知ると、地雷や貧困、不衛生などの言葉が頭の中に浮かんだ。しかし実際に行ってみると、確かに貧困な人も不衛生なところもあったがだれも不幸せそうな顔をしていない人を見当たらなかった。私が今回このカンボジア研修に参加した本当の理由は日本よりも栄えてない、貧しいカンボジアという発展途上国に行って、私たちが住んでいる日本は幸せだよ、私たちは幸せだよ、ということを知りたいから。今思うと、カンボジアを利用して自分の幸せを感じようとしていた過去の自分を責めたい。カンボジアの人は貧しいながらも必死に生きていた。こんなひとが世界にいるなんて思っていなかった。誰かのために働いて、誰かのために学んで、人生に負けないように、食らいつくように生きる人。環境を言い訳にせず、すべてを利用して生活している人。その中には幸せの顔が見えた。家族がいること、大切なひとがいること、おいしいご飯が食べられること。幸せの定義は、人によって違う。カンボジアの研修で様々な人と会うことで、こんな風に思うようになった。

すれ違うその人々にそれぞれ違う生活があって、家族がいて、物語がある。みんな違う夢があり、希望もある。日本では全く思わなかったことを思った。

地球は広い。今という瞬間はすごいと思った。研修のOFFの日にトンレサップ湖という東南アジア最大級の琵琶湖の10倍ほどの湖に行った。そこではサンセットを見ることができた。まっすぐ伸びた地平線にまん丸で真っ赤な太陽がゆっくり、はやく隠れていく。そのとき、世界にはいま太陽が昇った地域もあるのかと思った。すると、今生まれた赤ちゃんも、今死んだひと、今大切なひとに別れを告げられた人もいるのかとどんだん思うようになった。その今がどんなに濃い時間かその湖が知らせてくれた。その湖には多国籍の方が集まっていた。イスラエルやインドネシア、韓国など多くの人と話す機会ができた。世界って広いな。出会ってすごいな。この研修に参加していなかったら出会えなかった人が、何十人も何百人もいると思うと、参加してよかったと思う。またそこにはマングローブの中を小さい手漕ぎ船で見学するというツアーもあった。その船に乗ると、小さな子供を抱えたお母さんがその船を漕いでいた。汚れた服を着て、汚れた体で必死に船を漕いでいた。そこにはこう書かれていた。

「If you enjoy with the bout tour Please support us by tip for boat driver You're a little help will make a big change for our living」

世界にはこんなに苦しい中で生活している人がいた。私たちがおしゃれなカフェでゆっくりしているときに、私たちが洋服を選んでいるときに、必死にもがきながら汗水流して誰かのために働いていた。私たち日本人は、カンボジア人よりはるかに恵まれすぎている。それをどう活用するのか、あの人たちのために何が出来るか考える必要があると思う。

同じ地球なのに、空は繋がっているのに、なぜこんなにも格差が広がったのだろうか、なぜ支配する側

とされる側ができたのだろうか。歴史は変えられないが未来は変えられる。私はこれから必ずカンボジアのような国になにかできることをやると誓う。聞くだけではわからない、実際に見ないとわからない発展途上国の状況を知れてよかった。その中でも幸せに暮らしている人がいてよかった。人類みんな親戚だ。